

激動の5年間

国実 明美

広島市立看護専門学校看護教員

平成7年4月、10年間の臨床経験を経て、私の厚生省看護研修センターでの東京生活が始まりました。振り返ってみると、それが私の人生の「激動の5年間」のスタートだったように思います。

研修学校の1年間は、毎日が新鮮で刺激的なことばかりでした。この10年間、助産婦としていたい私は何をしてきたのだろう——。業務に流されて、勉強することを怠り、惰性でその日が過ぎればよいという状況で働いていた数年間——。研修センターでは、自分の知識不足を心底思い知らされました。“目から鱗”の毎日で、教育ということのみならず、幅広い視野や知識を得ることができ、助産婦という専門職の素晴らしさにも改めて気づくことができました。自分自身をあらゆる角度から見つめ直すことができ、乾いた大地に水が与えられるような、少しずつ生き返っていくような日々でした。

センターでの入学式の日、ある来賓の方が「東京は一つの大きな学校だと思って、1年間頑張ってください」と言われましたが、まさにその言葉のとおり、東京生活は大変勉強になりました。寸暇を惜しまず活動的に行動し、東京生活を堪能した1年間でした。東京では見るもの聞くものすべてが新鮮で、今思えば幻のような1年間だったような気がします。あの1年間がなければ、いまの自分はないとさえ思います。

大好きな光景

さて、私の一番好きな光景は、授乳の時の母と子の姿です。子どもは誰が教えたわけでもなく本

能として乳首をくわえ、母親は何とも言えぬ幸せそうな表情で暖かな眼差しでわが子を見つめます。私は臨床で働いていた頃から、その光景が大好きでした。

1年間の研修を終え看護学校の教員として元の職場に戻り、学生の実習中に再び授乳の光景を目にした時、私は“自分もあの母と子の姿になってみたい”と強く思うようになったのです。もっと言うならば、産む性として、女性として産まれた以上、産める時期に子どもを産みたいと願うようになりました。

そして、運よくも妊娠したのです。ついに憧れの妊婦になり喜んでいたのもつかの間、喜びは長くは続きませんでした。

私は臨床にいた頃から日々異常妊娠を目にしていたせいか、“普通に子どもが産まれることのほうが難しい”という感覚に陥っていました。常に「異常」ということが頭の中から離れず、妊娠経過に対して心配ばかりしていたのです。せっかく一生に1度か2度しか味わうことのできない貴重な妊娠体験だったのに、だからこそしっかりと妊娠生活を満喫しようと思っていたのに心配ばかりで、いまとなっては少々悔やまれます。

ついに、平成9年4月2日、40週0日で無事長男を出産。産後、初めて母乳を与えることができた時の感激は今でも鮮明に覚えています。わが子に母乳をあげることでできる喜び、その心地よさは、言葉ではなかなか表現できそうにありません。1歳6か月の卒乳まで、念願の母乳でずっと育てられたことは、いまでも誇りに思っています。



体験を通して得た学び

自分自身の妊娠、出産、育児の体験を通して、初めて理解できたことが山ほどありました。現代の母親が何を気にしていて、何に悩んでいるのかということも痛いほどわかりました。今まで助産婦として自信をもって指導してきたことが、ことごとく打ちのめされていくような気持ちでした。

相手の状況も察しないで自分のポリシーを優先し、「こうあるべき」というような指導をしていた今までの自分が、本当に情けなくなりました。指導をした褥婦さんたちに申し訳ないという気さえました。もう一度臨床に戻ることがあるのなら、今度は、「how to」型の指導ではなく、いろいろな選択肢を用意して、その中からご本人に合った方法を選んでもらおう。もちろん与えっぱなしではなく、その人に一番合った方法を一緒に考えていこう。当たり前のようであるけれど、そういった基本的態度を、これからの自分の助産観としてもち続けたいと思っています。

共に歩む

平成10年、育児休暇を終えて再び学校に戻りました。そして自分の体験を学校の授業や臨床の場で生かせるよう心がけながら、日々を過ごしていました。

ある助産婦研修会に参加した時、1人の開業助産婦さんが「現代の母親は育児に対してのこだわりが強く、できた・できないの評価やマニュアルを求めたがる傾向があるわりに、生活体験は乏し

く、赤ちゃんに触るのも怖いといった状況である。そんな中で母親と関わっていくためには、型にはめず自然に、他人と比較せずにできたことに対しての評価は行ない、否定的なことは言わない。そして振り向けばそこに助産婦がいるという安心感を与えることが大切である」と言っておられました。その話を聞いて私は、現代の学生も母親と同じ傾向にあり、母親と同じように学生にも関わっていくことが理想的であり、振り向けばそこに教員がいるという身近な存在でありたいと思いました。

臨床にいた頃は、学生のできていないところばかりに目がいき肯定的にみることができず、そんな自分が看護教員としてやっていけるのか、とても不安でした。けれど学生一人ひとりの成長やその学生の良いところを見るようにしてみると、人や物に対する見方が変わってきたような気がします。看護学校、助産婦学校の頃の自分は出来の悪い学生だったので、いま教員という存在でいることすらおこがましい気もしますが、そんな学生であつたからこそ、学生にとって身近な存在でいたいと思えるようになりました。

東京での生活がスタートしてから、看護教員となり、母となった、激動の5年間でした。教員生活も育児経験も今年で3年目。学生と共に、わが子と共に、教員として、母として、そして一人の人間として、いつまでも成長していかなければと思っています。

今回は、共に東京生活を過ごした堀悦子さんにバトンを渡します。 (くにざね・あけみ)